

女客

泉鏡花作

おんなきやく

樋口一葉と泉鏡花を再発見し
「語り」継ぐシリーズ【第一回】



語り 円地晶子
(無名塾)

演出 笠井賢一

音楽 佐藤岳晶

「貴女は命の親なんですよ。」とただ懐かしげに嬉しそうにいう謹の顔を、じっと見るく、ものをもちわず、お民ははらくと落涙した。「お民さん」「谨さん、私は今も、今だって、私もやっぱり同じなんです。厭でいやで死にたくなる時がありますとね、そうすると、あなたがきて、お留なさると思ってね、それを便りにしていますよ。」

樋口一葉と泉鏡花を再発見し「語り」継ぐシリーズで、その時々テーマについてのレクチャーと、樋口一葉と泉鏡花の作品を上演していきます。

第一回プログラム

レクチャー「泉鏡花と樋口一葉の生きた時代背景」 30分
語り 泉鏡花『女客』 40分

明治の文学は若い。

明治28年、鏡花は22歳で『夜行巡查』、『外科室』で文壇に登場、一葉は『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』の代表作を書き翌年24歳で逝去。

鏡花は明治36年、6歳年上の師尾崎紅葉の弔辞を門弟代表として読む。その2年後32歳で胃病悪化し逗子田越に転地、この年自伝的小説の傑作『女客』（この系譜は命を削って書き残した遺作『縷紅新草』となる）と、奇想天外な『月夜遊女』が書かれた。

当時鏡花が自作を語り「世に二つの超自然力があり、一つは観音力、一つは鬼神力で人間は到底不可抗力だ」。鬼人力の怪作『月夜遊女』を演じた円地晶子が、同時期逗子でかかれ、観音力の名作『女客』を語る。『女客』は金沢の恋する幼馴染のお民の観音力で謹（鏡花）が自殺を免れるという小説。

2026年

1月27日(火)

14時開演(30分前開場)

なかの芸能小劇場

自由席 3000円

主催 アトリエ花習

お申し込み専用フォーム↓

TEL 090-9676-3798

